石川啄木と梅川操

小　林　芳　弘

はじめに

釧路共立病院看護婦兼薬剤助手の梅川操が，石川啄木と最初に会ったのは，明治41年3月3日のことである。この日以降，3月末までの間にカルタ会やその他の用件で下宿屋を訪ねるごとに，彼女は急速に啄木に誘かれていった。その後，二人は釧路を離れ，約一カ月後の4月29日に東京で偶然顔を合わせた。そしてこの10回目の出逢いを最後に二度と会うことはなかった。

生前，啄木は自分の死後，日記を焼却するように妻に命じていた。しかし，節子にはそれができず，結局日記が残ってしまい，紆余曲折の末，戦後，公開された。この日記を見た梅川は，「啄木は大ウソつきで，日記はデタラメだ」と繰り返すようになり，その記事は再三新聞に掲載された[1)2)3)]。

日記が残され，公開されたことの意義は大きく，それによって啄木研究そのものが，大幅に前進したと考えられている[4)]。啄木研究の中で日記の占める意味は，測り知れないものがあることは確かである。しかしながら，日記をもとにした一連の啄木研究には，暗黙の前提があったことを見逃してはならないだろう。日記に記されていることは，すべて事実だということである。もし仮に，日記の内容にフィクションや事実と異なることがあれば，日記を下じきにして展開されてきた啄木研究の多くは，洗い直しが必要なことになるだろう。

梅川操が証言するように，啄木日記にはウソやデタラメがあるのか。果たして日記の内容は事実なのか。このことは，今後，日記そのものの研究，および日記をもとにした啄木研究を展開するうえで，避けて通ることのできない問題である。日記を論ずる際にきちんと解決しておく必要のある問題だと考えられる。しかし，これまで正面から取り組まれたことがなかった。

本論文は，現在われわれが知ることのできる梅川証言を詳細に分析し，彼女を記した啄木日記の内容に，ウソやデタラメがあるのか，それとも梅川証言に誤りがあるのかを検証したものである。そしてさらに，梅川が日記をウソでデタラメだと決めつけている背景を考察した。

1．梅川証言と啄木日記の食い違い

啄木や彼の日記に対する梅川の思いを伝える新聞記事は多い。ここではそのうち，昭和30年と34年のものを引用する。

「啄木は日記にずい分ひどいことを書いている。それも私が当時釧路新聞社の佐藤衣川に暴行されたなどと……。ひどい，あんまりひどい私はその衣川と婚約していたのだ啄木が釧路を去る五日前に上京，追っかけ上京してきた衣川と結婚したが，啄木とかけ落ちしたと新聞にかかれ，妊娠した時はまた衣川から〝石川の子なんかハラみやがって〟と悪態をつかれ，若い時から散々苦しめられた。

〝啄木ってヤツは大ウソつきです〟ハキだすようにいうコトバのハシにも長い怒と憎しみがこもっている。

笠井病院は下宿のすぐ前――豆ランプほどのハゲを治療に来て〝あこがれ〟という詩集をくれたのが知りそめ，何度か下宿を訪れ，海辺をあるいたが，二人きりになったことは一度もない。日記では小奴さんとカチあったなどとあるが，ウソだ。もともと〝ホレた，ハレた〟の間柄ではない。〈後略〉」（昭和30

年11月9日　北海道新聞)

「〈前略〉ええ，ええ，私が恋人だったんですよ。釧路時代の歌の多くは，わたしとの交際から生まれたものが多いんです。

〈中略〉

啄木の友人であり，ミサホさんの知合いでもあった佐藤衣川が，啄木の歌集『あこがれ』をもってきて『こんなエライヤツが向いのあそこにいるんだよ』とささやいたのが，若い二人を結びつけるきっかけとなった。

『あのころ釧路新聞にのった歌九首は，みんなわたしをうたったものなのです。ところがある日，啄木は〝オレには妻子がある〟とうちあけたんで，わたしもずいぶんおどろきました。いつまでも泣きつづけて……』

――泣くミサホさんを，啄木は冷たく見おろして『これもまた愚劣だ』と，はきだすようにいったそうだ。

啄木との恋はこれで終り。〈中略〉

『啄木という人はずるい男でした。〝これも愚劣だ〟なんて，あのコトバも，ちゃんと計算のうえのことだったんですね。それでもニクメなかった……。ただ一つ，わたしがおこったのは，日記にウソが書いてあることです。わたしと小奴さんという人と張りあったように書いてありますが，あれはウソです。日記が公表されてそのウソを知ったときは，啄木がにくらしくて，函館のお墓にダイナマイトでもしかけようかと思ったくらいでした。』

〈後略〉」(昭和34年1月8日北海道新聞)

二つの北海道新聞記事に共通して梅川がウソだと指摘しているのは，小奴とカチ合って互に意地を張り合ったとされる部分である。さらに，昭和30年記事の方で，大ウソだとしているのは佐藤衣川に暴行されたとする点であろう。梅川にとってそのことが「ひどい，あまりにひどい」ことであったのである。佐藤衣川との出来事と，それに続く小奴との意地の張り合いは，関連した事件でありセットになっている。啄木日記が事実か，梅川証言が正しいのかについて，この部分を中心に検証する。

その前に，梅川証言と比較するために，梅川事件が起こったとされる明治41年3月21日の啄木日記を引用する。この日は，春季皇霊祭で祝日のため新聞社も休みであった。啄木は一日中下宿にとじ込もっていたが，夜9時頃横山を連れて鶴寅へ出かけ，12時すぎに小奴を伴って三人で帰宿した。

「兎角して一時となった。〝石川さん〟といふ声が窓の下から聞える。然も女の声だ。窓を開けば，真昼の如き月色の中に梅川が立って居る。〝お客様がありますか〟〝あります〟〝誰方？〟此時奴は梅川と聞いて，入れろと云ふ。〝お這入りなさい。〟

月は明くても，夜の一時は夜の一時である。女の身として，今頃何処をどう歩いて来たものか一向合点がいかぬ。入り口の戸をトントン叩いて室に入った顔を見て驚いた。何といふ顔だらう。髪は乱れて，目は吊って，色は物凄くも蒼ざめて，やつれ様ッたらない。まるで五六日も下痢をした後か，無理酒の醒めぎはか，さらずば強姦でもされたと云った様の顔色だ。這入って来て，明い燈火に眩しさうにしたが，〝あまり窓が明かったもんだから，遂……と挨拶をする。〝これは梅川さん，これは私の妹〟と紹介すると，〝おや，貴女は小奴さんで〟と女は挨拶。顔を上げた時，唯一雫，唯の一雫ではあったが，涙が梅川の目に光った。

横山と二人で，頻りに目で語って見たが，一向要領を得ぬ。今時分，若い女が唯一人，怎して歩いて居たのだろう。それは，よしや此女の性格として，有りうべからざる事で無いにしても，今時分下宿に居る男を訪問するとは何事だ。且つそれ其顔色は，と幾可疑っても少しも解らぬ。唯，今夜は此女の上に何かしら大事件があったのだナと云ふだけが，明瞭に想像せられる。

梅川は殆んど何も云はなかった。唯時々寂しく笑ふては，うつむいて雑誌などをまさぐって居た。一時が二時となり，三時になった。それでも帰らうとせぬ。奴も亦帰らうとせぬ。ハハア，根気競べをして居るのだナと思って，

自分は奴と目を見合して笑った。

夜が闌として，人は皆鼾のモナカなのに，相対して語る四人の心々。雞の声が遠近に響いて暁が刻々に近いて来る。

遂に四時になった。懐に右手を入れて考へ込んで居た梅川は，此時遂々〝どうも晩くまで失礼しました〟と云って帰って行った。〝勝つ筈ですッ，お呪符を二つやりましたもの。〟

見れば，小さい篦甲の髪差を逆さにさして居て，モ一つは，蹴出しの端を結んで居た。これを以て客を帰す呪符だと，我が無邪気な妹は信じて居る！

〝私が勝ったんだから，これを貰ってっても好いでせう〟と奴は云った。梅川が拵へて来た一輪の紅の薔薇の花は，かくて奴の物となった。五分許りして奴も亦独り帰って行った。

奴の帰った時，云い知れぬ満足を感じて，微笑を禁じ得なかった。冷えきった茶を飲み干して自分は枕についた。

が，が，暫しは眠れなかった。」

梅川は，この日記の中で，小奴と対面したように書かれているが，そのような事実はなかったと言っている訳である。ところが，啄木日記によれば，翌３月22日に梅川は再度啄木の部屋を訪ねている。前日は，先客があったためにできなかった話をしに行ったのだろうか。したがって，３月21日に起こった事と翌22日の日記の内容は深く関連していると考えることができる。21日の事実を否定するのであれば，当然翌22日に啄木の部屋を訪れたことをも容認できないはずである。このような意味で，梅川事件に関しては啄木日記の方も二日分がセットになっていると考える必要がある。したがって，ここでは，二日分合わせて検討することにする。

「日曜日

小奴からの使で目をさました。十一時半。手紙に添へて，去年の夏捉ったといふ小蝶と二人の写真を贈って来た。

揃ひの浴衣，立っているのは小蝶で，左の手を挙げて胸のあたりに白い花を持って居る。右手は，腰かけた小奴の肩。奴は右の手で，其手をとって，横を向いて幽かに笑って居る。小蝶といふ女には，毒がある。奴はハッキリして居る。輪郭が明かである。少しも翳がない。花にすれば真白の花である。

江戸のてい子さんから長い手紙が来た。

一時頃，梅川から，二時から三時までの間に訪問するといふ手紙が来た。所へ上杉君が来た。昨夜十一時頃，泥酔した衣川子と梅川が米町を歩いて居た事を聞く。上杉君は，屹度衣川が梅川を姦したに違いないと云ふ。昨夜の事を思合して見ると，成程と思はれる節の無いでもない。よしソンなら，今日すっかり白状させようと，上杉君をば横山君の部屋にやって置いて，室を浄めて待って居た。

間もなく梅川が来た。怎やら浮かぬ顔をして，其癖，目が輝く。所へ鹿嶋屋の市子が遊びに来た。二十分許り居て帰る。玄関で〝お楽しみ！〟などと狎戯けて出て行く。

〝昨夜は，私悪魔と戦って勝って来ました。〟と梅川が云ふ。其話は，昨夜衣川が病院に来て飲んで，十一時頃梅川を連れ出した。厳嶋神社へ行って口説いて，アハヤ暴行に及ばむとしたのを，女は峻拒して帰って来たのだといふ。衣川は愍むべき破綻の子，その一身の中に霊と肉が戦って，常に肉が勝利を占めている男である。別れ際に〝貴女は僕より豪い。〟と云ったとか。

〝私，悪魔と戦って勝ったのですネ。愉快でした，愉快でした，実にもう愉快でした，だから私，昨夜アンナに遅かったけれど，お知らせしようと思って伺ったのでした。〟

予は一種の戦慄を禁じえなかった。此女は果たして危険な女であると思った。浅間しいやら，可愛相なやら。〝花は怎うなすって？〟とは此女が此室に這入って来て初めて出した語である!!

上杉君と横山君が這入って来て，一緒に忠告した。語を円曲にして，今度訪ねて来ては不可ぬと云ふ事も云った。日が暮れても帰らぬから，お帰りなさいと云って帰してやった。

男は男，女は女！　噫，女は矢張女であると考へて，洋燈をつけた。急に心地が悪い。

不愉快で，不愉快で，たまらない程世の中が厭になった。〈後略〉」（3月22日日記）

2．梅川証言の分類

梅川操は，自分のことを記した啄木日記がすべてウソやデタラメだと言っている訳ではない。そう言っているのは，限られた一部の箇所だけである。他の部分については，むしろ，積極的な肯定ともとれる発言をしている。

昭和30年と34年の北海道新聞記事を注意深く読んでいくと，梅川証言は次の三つに分類されることがわかる。

①日記を肯定している部分

②時間とともに証言が変化する部分

③日記を否定している部分

以下にそれぞれについて具体的な例を示す。①にあてはまることがらとして挙げられるのは，「何度か下宿を訪れ，海辺を歩いたが，二人きりになったことは一度もない。」という部分である。釧路時代に限れば，二人きりになったことがないというのは，日記の内容と矛盾しない。

②にあてはまることがらとして，二つ挙げられる。一つは，30年記事で，「ホレた，ハレたの間柄ではない」としていたものが，34年記事では「わたしが本当の恋人だったんですよ。釧路時代の歌の多くは，わたしとの交際から生まれたものが多いんです。」に変わっていることである。この背景には様々な事情が考えられるが，いずれにしても，釧路時代に啄木と交際をしていた事実を梅川が認めていることが重要である。

二つ目は，「笠井病院は下宿のすぐ前，――豆ランプほどのハゲを治療に来て〝あこがれ〟という詩集をくれたのが知りそめ」が「啄木の友人であり，ミサホさんの知合いでもあった佐藤衣川が，啄木の歌集『あこがれ』をもってきて『こんなエライヤツが向いのあそこにいるんだよ』とささやいたのが，若い二人を結びつけるきっかけとなった。」に変っていることだ。ここには梅川自身の記憶違いがあり，啄木，衣川と梅川との関係を考察する際に極めて大切な部分である。笠井病院が関下宿のすぐ前だったことに間違いはない。しかしながら次の「豆ランプほどのハゲを治療に来て」という事実はなかったと考えられる。啄木のハゲは，小奴との関係をからかう際にひき合いに出され，釧路新聞紙上にも掲載された[5]。

「小奴の岡惚れし過ぎるには呆れたネー先日晩もランプ屋の弟さんの笑ひ顔に岡惚れしたとて翌早朝から市中を駈け摺り廻はっている（曲又印）」（明治41年2月25日釧路新聞「はがき集」記事）

そして，ハゲの治療のための薬を，笠井病院からもらっていたのではない。

「予て毛生薬を貰ふ約のある釧路病院の俣野君を訪ふ。これも留守。今日は人間が皆家に居ぬ日だと思ふ。」（2月16日日記）

「昨日留守中に釧路病院長の俣野君が置いて行って呉れた毛生液を今夜からつけ初めた。」（2月17日日記）

日記には，治療のために共立笠井病院に出向いたとは記されていない。

次に，「あこがれ」の問題である。これには梅川自身が自分の記憶違いと気づき，昭和34年記事で「佐藤衣川が持って来た」と訂正しており，そちらが正しいと思われる。

以上のことから，②の後日訂正や変更したあとの内容については，梅川が事実と認めていることとして処って良いと考えることができる。

梅川は，30年記事の中で，「衣川と婚約していた」と語っている。釧路時代に本当に結婚の約束をしたのかどうかは定かではないが，実際に，明治41年初夏から約半年間は東京でいっしょに生活していたことを考えれば，佐藤衣川から求婚されていた可能性は否定できないだろう。啄木と梅川の関係を考えるうえで，佐藤衣川の存在は極めて重要なのだが，これまで十分考察されてきていない。そこで次に，①，②のことをもとにして，佐藤衣川と梅川の関係を注意深く考慮しながら，啄木と梅川の出逢いから二人が接近する経過を見ていきたいと思う。

3．啄木と梅川の出逢い

啄木と梅川が釧路で初めて会ったのは，明治

41年3月3日のことである。この日は，本行寺のかるた会で顔を合わせた程度で，名前を知ったのは，3月10日に手紙をもらった時である。

「朝，向いの笠井病院の看護婦梅川操といふ女から手紙が来た。一度加留多会に逢っただけの人，不思議に思って封を切ると，それは三尺娘から依頼されて，会見の日時を尋ねる手紙。返事は態としてやらぬ」（3月10日日記）

二度目に会うのは，3月13日である。夜，三尺ハイカラの件で梅川が啄木の部屋を訪ねた。日記の中の「横山と二人で応接する」という言葉の中に，三尺ハイカラなる女と，その使いの梅川に対する警戒の意識が感じられる。

三尺ハイカラは，啄木日記の中では本行寺の娘，小菅まさえとなっているが，そのような実在の人物はいないようなので，渾名で呼ぶことにする。三尺ハイカラが啄木日記に登場するのは，2月11日が最初である。新夕張炭山の事故災害の義損金集めのため北東新報社が主催した慈善演劇があり，啄木はこれに二日連続で出かけている。

「釧路座の慈善演劇へ行った。昨夜よりは見上げる許り上手に演って居た。同じ桟敷に本行寺といふ真宗の寺の奥様が娘のハイカラと一緒に居たが，釧路病院の俣野君や太田君も来合わせて仲々賑やかであった。娘の手は温かであった。」（2月11日日記）

初対面で啄木は娘の手を握ったのであろう。それ以来，娘は頻繁に啄木を訪ねたようだ。梅川がなぜ，三尺娘と啄木との間に入ったのかは不明である。3月10日に梅川に頼んで手紙をやってもらったことに対して，返事がないことに業を煮やしたのか，3月12日には留守中に下宿を訪ねたりしている。三尺娘から頼まれたのか，弱り果てた啄木が呼んで来てもらったのかは不明だが，3月13日に梅川が訪ねてきた。

「夜，梅川が来た。横山と二人で応接する。結局此第三者二人に全権を委任して，一度だけ三尺を連れてくる事，其時巧く芝居をやって将来寄せつけぬ様にする事と議一決。

梅川は十一時頃まで居た。そして色々な話をして行った。〈後略〉」（3月13日日記）

このあと日記には長々と梅川の身の上話が記された。

この日の話の中で，明日にでもかるた会をしようということになったのだろうか。翌14日夜，啄木の下宿で催されたかるた会に，梅川は途中から加わった。

「夜，歌留多会を開く。来会者，小泉，横山，羽鳥，野村，高橋，平尾，佐藤，と僕。久し振りで腕は鈍って居たが，自分が一，佐藤が二，横山が三，男許りで騒いでいる所へ梅川が来て，遂々一の株を奪われた。

女は一番遅くまで残った。僕も横山も眠さうな顔をしたので三時半やうやう帰る。」（3月14日日記）

3月15日には，二日連続のかるた会が開かれた。この二度目のかるた会が，三尺娘をこれ以上寄せつけないようにするために，13日に仕組まれたものであった。日記には，「梅川と三尺が来て歌留多。小泉佐藤らも一寸来て帰った。横山が巧く芝居をやってくれて，三尺は，モウ之で満足だから今後来ぬと云ふて帰る。」と記している。それにもかかわらず，後日また娘は啄木の下宿を訪ねているので，この計画が成功だったのかどうかはわからない。

ここで注目しておく必要があるのは，啄木との仲介役として登場したはずの梅川が，途中で三尺娘を裏切り，二人の仲をひき離す工作に加担したことと，その過程の中で自分自身が啄木に急接近していったことである。10時頃，三尺娘と梅川を送るために外へ出たはずの啄木と横山は，三尺娘一人だけを送り届けたその足で，波止場へ向かった。

「〈前略〉十五夜近い月が皎々と照って，ヒタヒタ寄せてくる波の音が云ふ許りなくなつかしい。船が二隻碇泊して居る。感慨多少。名刺を波に流した。二人も流した。芸者の名刺も流した。潮が段々充ちて来た。自分らは，梅川の袂に入れて行ったビスケットを嚙って，〝自然〟だと連呼した。

月が明るい。港は静かだ。知人岬の下の岩に氷交じりの波がかかると，金剛石の如く光

る。光る度に三人は声を揚げて〝呀〟と叫んだ。三人！　二人は男で一人は女！　三人は〝自然〟だと叫ぶ。三人共自然に司配されて居る。そして寧ろそれを喜ぶものの如くであった。噫，自然か，自然か。此夜の月は明かったが。

〝三月十五日は忘れまい〟と一人が云い出した。〝さうだ，忘れられぬ〟と一人が応じた。かくて此三人を〝ビスケット会〟と名づけた。〝ビスケット会は自然によって作られ，自然を目的とす〟と誰やらが云ひ出した。〝毎月十五日は，お互い何処に居ても必ずビスケットを食ふことにしませう〟と女が附加した。二時頃月を踏んで帰って寝る。〈後略〉」（3月15日日記）

4．二人の接近

3月15日，夜10時頃から午前2時まで海岸を散歩していたことが災いしたのか，16日，17日と啄木は釧路新聞社を欠勤した。心配した日景主筆は，夕方，佐藤衣川を連れて様子を見に来た。三人で夕食を食べたところへ，梅川が訪ねて来た。

「梅川が，小さい花瓶に赤いリボンを結へて，燃ゆるような造花の薔薇一輪をさしたのを持って来た。日景君が散々揶揄する。」（3月17日日記）

このあと梅川を送っていくために外へ出た。そしてまた，二日前に行った浜辺へ向った。前回は啄木・梅川のほか横山がいっしょだったが，今回は，横山ではなく佐藤衣川が同行した。

「二人が帰るといふので，門口まで送ると，戸外には霜かと冴ゆる月の影，ウッカリ下駄をつッかけて出た。心地がよい。誰の発議ともなく，復，此間の晩の浜へ行った。汐が引いて居て砂が氷って居る。海は矢張静かだ。月は明るい。氷れる砂の上を歩いて知人岬の下の方まで行くと，千鳥が啼いた。生まれて初めて千鳥を聞いた。千鳥！　千鳥！　月影が鳴くのか，千鳥の声が照るのか！　頻りに鳴く。彼処でも此方でも鳴く。氷れる砂の上に三人の影法師は黒かった。」（3月17日日記）

3月17日夜の梅川の行動で注目しなければならないことが二つある。第一が，啄木の部屋を訪問した目的である。前回までは，三尺娘と啄木の仲介問題の解決が目的であった。今回からは違っている。欠勤している啄木へのお見舞の意味だろうか。それともほのかな思いを託してか，紅い造花の薔薇をプレゼントに持ってやって来た。第二は梅川がこうして真正面から啄木に接近して来た現場に，佐藤衣川がいたことである。

翌，18日は出社した。三日も続けて欠勤する訳にもいかなかったのだろう。出社した啄木は，おもはれ人というペンネームで，「釧路詞壇」に掲載するための歌を創った。夕方，4時に仕事を切りあげて帰宿すると，ちょっとした騒ぎが起こっていた。三尺娘が横山の部屋に来ており，帰ったあと向いの病院の梅川に手紙をやって呼ぶと泣いていた。

「泣いて居る。涙がとめどもなく流れる。何といふても泣いて居る。此女も泣くのかと思った。」（3月18日日記）

梅川はどうしてこんなに泣き続けたのか。

横山の部屋で，今後この下宿に訪ねて来ないようにきつく言われた三尺娘は，帰りに共立笠井病院に寄って，〝今後石川さんに途中で逢っても言葉もかけぬから御安心なさい〟という捨てゼリフを残したという。これは梅川に対する当てつけだろう。この時点で三尺娘は，仲介役を頼んだはずの梅川が啄木にのめり込んでいることに気づき，横取りされたという感情を抱いていたのではないかと想像される。しかしながら，梅川が泣き続けたのは，三尺娘に言われたことが原因ではなかっただろう。

「上杉君が先刻来て，三尺の事を云った時，何か気に障る言を発したとかで，アトで口惜しくて口惜しくて，一人人の居ない診察所に入って声を放って泣いた事，そこへ衣川子が来て親切な言を以って慰めた事。そして頻りに泣く。横山も自分も，殆んど持余した。」（3月18日日記）

梅川が泣いているのは，上杉の言葉が気に障ったからだ。啄木の同僚である上杉小南は，この

時梅川に対して一体何を言ったのであろうか。

昭和34年の梅川証言の中に，「『ところがある日，啄木は〝オレには妻子がある〟とうち明けたんでわたしもずい分おどろきました。いつまでも泣きつづけて……』――泣くミサホさんを啄木は冷たく見おろして『これもまた愚劣だ』とはき出すように言ったそうだ。」というくだりがある。梅川証言では，啄木本人が「妻子がある」と言ったことになっているが，妻子があることを梅川に伝えたのは，上杉小南だったのではないだろうか。三尺娘に頼まれて，仲介役として登場した梅川が，何度か啄木に会い浜辺を散歩する間に，自分自身が恋心を抱くようになり，造花の紅い薔薇を贈るようになっていった。そのほのかな恋の相手に妻子があったことを聞かされ，なげき悲しんだのがこの場面なのではないかと思われる。合計10回におよぶ出逢いの中で，梅川が激しく泣く場面はここしかなく，彼女を詠んだとされる

頬につたふ涙のごはぬ君を見て
　我が魂は洪水に浮く

という歌が釧路新聞に発表されたのが3月20日だから，泣いた日は3月19日以前に限定される。19日以前で二人が逢ったのは18日が最後である。18日以前にも泣いた様子はない。

ひたすら泣きじゃくる梅川，泣いている理由もわからずなだめようもなく立ちつくす二人の男，持て余した啄木の口から吐き出された言葉が「これもまた愚劣だ」だったのだろう。

梅川が泣いた翌日，19日の釧路新聞に四首の歌が掲載された。

冬の磯氷れる砂をふみゆけば
　千鳥なくなり月落つる時

君を見て我は怖れぬ我を見て
　君は笑ひぬその夕暮に

一輪の赤き薔薇の花を見て
　火の息すなる唇をこそ思へ

釧路潟千鳥なくなる夜の波の
　此月影を忘れずと言へ

赤い薔薇を見てあなたの唇を思う，二人で見た千鳥なく夜の月を忘れないで欲しいという意味の歌である。この歌を見た瞬間，梅川は啄木からの愛のメッセージだと解釈したに違いない。これに，追い打ちをかけるように，翌20日にはまた五首が掲載された。

月のぼり海しらじらとかがやきて
　千鳥来啼きぬ夜の磯ゆけば

むらさきの花こそ咲きぬ百草の
　中に選りたる手弱の茎に

春の雨夜の窓ぬらしそぼぬれて
　君か来るらむ鳥屋に鳩なく

頬につたふ涙のごはぬ君を見て
　我が魂は洪水に浮く

何しかも泣くやと問へど君いはず
　いざと手とれど君は笑はず

3月13日の日記の中で啄木は梅川を，「常に紫を含んだ衣服を来ている」と表現している。歌の中の「むらさきの花」は梅川本人であり，大泣きに泣いた涙までもが美しい歌に昇華されている。これが恋の歌でなくてなんであろうかと，梅川は天にも昇る心地がしたに違いない。

5．啄木と小奴

啄木と梅川が接近する一方で，啄木と鶴寅芸者小奴との関係も深まりつつあった。啄木が小奴と初めて顔を合わせたのは，2月21日の冬期鉄道操業視察隊一行の公民合同歓迎会の席だった。翌朝，小奴は佐藤衣川を訪ねて，啄木を連れてきてくれと頼んだという。22日の日記には，「小奴が佐藤君を今朝訪ねて，何か僕の事を云ったとかで，少し油をとられて大笑い。」と記されている。このあたりの事情をからかって記事にしたのが10頁右6行目から引用した豆ランプの投書である。啄木が釧路へ来てわずか一カ月，「豆ランプ」などという渾名を知る人が多くい

たとも考え難い。さらに小奴が衣川を訪ねて啄木のことを言って行ったことを知る人といったら，釧路新聞社内の啄木の近くにいた人間に限られてくる。これは佐藤衣川が書いたものと考えることができる。これ以降，啄木自身が小奴との仲を周囲に吹聴するような記事も書いており，二人は急速に接近していく[5]。3月3日夜，鉄道操業視察隊の一員として出張していた日景主筆の慰労会が鶴寅で開かれ，散会したあと啄木は衣川と連れ立って本行寺のかるた会へ出かけ，その帰りに再度小奴と逢っている。この時二人は，かなり濃密な会話を交わし，互に後髪をひかれる思いで別れたと想像される。

「小奴の長い長い手紙に起こされる。先夜空しく別れた時は〝唯あやしく胸のみとどろぎ申候〟と書いてあった。相逢ふて三度四度に過ぎぬのに何故かうなつかしいのかと書いてあった。〝君のみ心の美しさ浄けさに私の思いはいやまさり申候〟と書いてあった。」（3月11日日記）

「先夜空しく……」の先夜とは3月3日のことである。この手紙を読んだ啄木はその日のうちに返事を書いた。

「夜に入って雪は雨となった。葡萄酒を飲んで小奴へ長い長い手紙の返事を長く長く書いた。俺の方では，名も聴かなかった妹に邂逅した様に思ふが，お身は決して俺に惚れては可けぬと。」（2月11日日記）

3月20日夜，北東新報社に入社した菊池に会い，小泉と三人で鹿嶋屋に出かけた。その後，鶴寅へ鞍替，12時半に小奴といっしょに店を出た。

「手を取合って，埠頭の辺の浜へ出た。月は淡く又明かに，雲間から照す。雪の上に引上げた小舟の縁に凭れて二人は海を見た。少しく浪が立って居る。ザザーッと云ふ浪の音。幽かに千鳥の声を聴く。ウソ寒い風が潮の香を吹いて耳を掠める。

〈中略〉

月の影に波の音。噫忘れられぬ港の景色ではあった。〝妹になれ〟と自分は云った。〝なります〟と小奴は無造作に答えた。〝何日までも忘れないで頂戴。何処かへ行く時は屹度前以て知らして頂戴，ネ〟と云って舷を離れた。〈後略〉」（3月20日日記）

6　佐藤衣川

梅川操を論ずる場合に，佐藤衣川の存在は極めて重要なのだが，これまで必要以上に軽く見られてきた。ここでは，できる限り詳細に梅川と佐藤衣川の関係を見ていきたいと思う。

福地順一[6]によれば，佐藤衣川は本名巌，岩手県西磐井郡金沢村字南金里（現花泉町）に父俊徹，母ちよの次男として明治14年3月22日に生まれている。啄木が明治37年10月に処女詩集「あこがれ」の刊行のため，東京駿台の養精館に止宿してしていた時，衣川もそこに同宿していた。当時，衣川は養精館に宿をとりながら神田の私宿でシナ語の教師をしていた。一方では催眠術にも凝り，また，新教を奉ずるクリスチャンでもあった。衣川はその後，間もなく東京小石川に家を借り，「東京心理療院」の看板をかかげ，催眠術療法を人に施したりしていたが，経済的にうまくいかず，職を変え各地を転々とする。啄木が釧路へ行く前年の秋に釧路へ渡り，釧路新聞に入社するまでの間に，料理屋の出前持ちまでやったという。いつ，どのようなきっかけで梅川と衣川が知り合ったかについては，不明であるが，いずれにしても，梅川にとっては衣川は，啄木と出逢う前からの知人であった。

梅川証言の中に出てくる，啄木詩集「あこがれ」を衣川が病院に持って行って見せたというのは，一体いつ頃のことなのだろうか。2月6日の日記の中に，釧路の本屋の事情を「釧路には唯一軒の本屋正実堂と云ふがあるきり。松屋でも取次はするが，本は一冊もない。」と紹介している。ところが，本が一冊もないはずの松屋で，啄木は自分の処女詩集「あこがれ」を発見するのである。

「五時〆切って帰る。途中方々の払を済し松屋の佐々木君から自分の〝あこがれ〟一部没収して来た。」（2月29日日記）

ここから，松屋にあった「あこがれ」は複数だったことが予想され，啄木はそのうちの一部

を金を払わずに持って来た可能性が高いと考えることができる。衣川が梅川に示した「あこがれ」は，この日啄木が没収してきたものではなかったのか。翌３月１日は日曜日だったので，この詩集を社内の人間に披露できたのは３月２日だろう。それを借り受けた佐藤衣川が，早速梅川に見せたものと想像される。そうだとすれば，梅川が佐藤衣川を通して，啄木の存在を知らされた時期は，３月２日以降の３月初めということになる。本行寺のかるた会に衣川と二人で出かけたのは，３月３日のことであるので，「あこがれ」を見せてもらったとほぼ同じ時期に，梅川と啄木は出逢ったと考えられる。３月３日は鶴寅で日景主筆の慰労会があり，かなり酒が入っていたことや，啄木の気持ちが小奴の方へ向いていることなどを考えると，本行寺のかるた会も衣川に誘われて行った可能性が強いと思われる。

ところで，佐藤衣川は何のために「あこがれ」を病院にまで持ち込んで梅川に見せようとしたのだろうか。佐藤衣川が共立笠井病院を訪ねて梅川に会っている様子は，啄木日記の中に何度か記されてるが，衣川はずっと梅川に恋心を抱いていたと思われる。啄木が松屋で見つけて没収してきた「あこがれ」を梅川に示すことによって，衣川は自分の人脈をひけらかす気になったのではないか。啄木の威光を借りて自らを売り込む気持ちがどこかにあったのではないかと想像される。しかしながら，事態は衣川の思惑通りに進展しなかったどころか，作戦は完全に裏目に出たように見える。

三尺娘から，啄木との仲介役を頼まれた梅川が，逆に二人をひき離す側にまわって計画を練ったのが３月13日であるが，この夜彼女は11時頃までいて自分の身の上話をして帰った。翌14日は，男ばかり８人が騒いでいるかるた会に，あとから加わって，結局最後まで居残った。日記には「女は一番遅くまで残った。僕も横山も眠さうな顔をしたので三時半やうやう帰る。」とある。この日は土曜日なので，翌日の仕事の心配をしないで遊べるという気持でもあったのか，梅川はしぶしぶ帰ったという雰囲気が日記から伝わってくる。３月15日が三尺娘のために仕組まれたかるた会であった。会が終って夜10時に三尺娘を送った帰り，啄木，横山，梅川の３人は波止場の先の浜辺へ散歩した。啄木が下宿へ戻ったのは，午前２時であった。この二日続きのカルタ会に，連夜佐藤という男の名が見える。15日の日記には，「小泉佐藤らも一寸来て帰った。」と記されており，途中で帰ったと推定される。釧路時代の佐藤という名の啄木の知人は二人いた。一人は釧路新聞理事の佐藤国司で，啄木も何度か自宅を訪ね指示を仰いだりしている。かるた会が当時の若い男女の社交の場であったことを考えれば，年齢がはるかに離れた上司にあたる佐藤国司が，新聞記者たちと二晩も続けてかるた取りに興じたとは考え難い。もう一人が同僚の佐藤衣川である。本行寺のかるた会に啄木と一緒に出かけていることからも，ここに出てくる佐藤とは衣川に他ならないだろう思われる。自分が思いを寄せている梅川一人を残して，どのような感情を胸に抱いて衣川は家路についたことだろうか。

３月16・17日と啄木は欠勤した。15日が日曜日なので，三連休ということになる。17日夕方，日景主筆と佐藤衣川が新聞社の帰りに立寄った。三人で夕食をすませたところへ，梅川が紅い造花の薔薇を持って現われた。この日の梅川の訪問は，過去３回とは全く意味が違う。自分の身の上話をしたり，浜辺を散歩したりということはあったが，これまでは三尺娘とのかかわりで来ていた。お見舞いの意味だろうか。心に秘めた思いを伝えるためだったろうか。花瓶にさした薔薇一輪を持って，今回は自らの用件でやって来た。

自分が恋している女が，目の前で他の男にプレゼントをしている。しかも，それは女が最も得意とする造花の技術を駆使した燃ゆるような紅い薔薇だった。衣川の心中は穏やかではなかっただろう。しかも，この様子を見た上司の日景安太郎は，散々揶揄した。ここから，日景は勿論のこと，このことを日記にあっけらかんと書いている啄木にも，衣川の心境は全くつかめていないことがわかる。さすがにこの日は，梅川

一人を啄木の部屋に残して帰ることはできなかったのであろう。日景が帰ったあとも衣川は居残った。帰りにまた前回と同じ浜辺へ散歩した。

「二人が帰るといふので，門口まで送ると，戸外には霜かと冴ゆる月の影，ウッカリ下駄をつッかけて出た。心地がよい。誰の発議ともなく，復，此間の晩の浜へ行った。」（3月17日日記）

ここで，「誰の発議ともなく」と記されているが，三人のうちで前回も深夜の浜辺を散歩したのは啄木と梅川だけである。衣川は行っていない。行っていない衣川が，この間の晩の浜辺などと言い出す訳がないから，「誰の発議ともなく」は，「啄木，梅川どちらからもなく」と読み替えることが可能である。啄木の視野の中に衣川は入っていない。

この日，佐藤衣川は，梅川の心が大きく啄木に傾いているのを感じたことだろう。詩集「あこがれ」を見せに行った作戦が，完全に裏目に出たことを思い知らされたのではないだろうか。その翌日の梅川大泣きの現場にも，佐藤衣川の姿が見える。

「一人人の居ない診察所に入って声を放って泣いた事，そこへ衣川子が来て親切な言を以て慰めた事。」（3月18日日記）

このくだりから，佐藤衣川は，梅川の様子が気になって病院に出向いたことが窺える。

ところが，このあと衣川の心痛がさらに大きくなるようなことが続けて起った。19日と20日の2回に分け，知人岬の浜辺を散歩した時の様子を歌に詠んで，啄木は釧路新聞に発表したのである。歌の中には，氷れる冬の海のみならず，梅川がプレゼントした薔薇の花までも詠み込まれていた。それを見た梅川は喜び，啄木への感情はさらに高まっただろう。これに伴って衣川の緊張感も急激に増幅されたに違いない。

7．梅川事件

これまで，梅川事件前日の3月20日までの経過を見てきた。すなわち，梅川自身が認めている啄木日記をもとにして，二人の出逢いから梅川が啄木にひき寄せられ夢中になっていく過程，それと並行して進行していった小奴と啄木との関係，梅川の様子を気をもんで見守る佐藤衣川の状況などである。ここでは，四人の若き男女の同時進行形の人間模様の流れの中で，3月21日に，梅川事件なるものが現実に起り得たのかどうかを検証する。

啄木は前夜に続いて鶴寅で飲んだ。前夜は小奴と手に手をとって浜辺を散歩して別れたが，この夜は，小奴を下宿に連れてきた。横山もいっしょではあるが，そのまま部屋に上がり込んで茶を飲んだという状況は，前夜の流れから判断すると不自然ではない。この夜，12時過ぎに小奴が啄木の部屋に居たのは事実であろう。あとは，梅川が午前1時に啄木の部屋を訪ねるということがあったのかどうかだけが問題である。

これまでに啄木は，二人の釧路芸者と親密な関係になっていたと考えられる。一人は㋭喜望楼の小静であり，他の一人は鹿嶋屋の市子である。二人とも当時の釧路を代表する売れっ子芸者であった。小静との関係について，啄木は日記に記していないが[7]，社内でも話題にはなっていた。市子との関係については，拙書，「啄木と釧路の芸妓たち」の中で詳細に述べた[5]。最初，啄木と市子の関係を裏付ける資料はなかった。二人が本当に深い関係にあったとすれば，当時の新聞の中にそれをほのめかす記事が残っているはずである。そのような考えで釧路新聞記事をていねいに洗い直した結果，啄木離釧後に市子を鋭く攻撃する記事が発見された。このような事実から啄木と市子の関係が立証できた訳であるが，その記事を書いたのが佐藤衣川であったと判断される。

この二人の釧路を代表する芸者のあと，啄木は鶴寅の看板の小奴と接近し始めた。小奴と啄木が交際するきっかけをつくったのも衣川であり，啄木が最初に小奴の家を訪ねた時も衣川がいっしょであった。啄木と釧路の三人の芸者たちとの関係を，最も身近にいて熟知していたのが，同僚佐藤衣川その人だったと考えることができる。

一方で，衣川が思いを寄せる梅川もまた，啄木との出逢い重ねる毎に，啄木に吸い寄せられ

て行った。梅川が造花の薔薇を啄木に贈った翌日の夜，衣川は一人共立笠井病院に梅川を訪ねている。泣いていた梅川に親切な言葉をかけて慰めた。この日，衣川は何を伝えようとして梅川に会いに行ったのかは不明だが，彼の居ても立ってもいられない気持ちがあらわれているように感じられてならない。3月19・20日と連続して釧路新聞に梅川を詠んだ歌が掲載された。これを読んだ梅川が，この先どうなっていくか衣川に予測ができただろう。釧路へ来て間もないにもかかわらず，複数の芸者と親密な関係になる啄木が相手では，自分の方が年長だとはいえ，勝ち目がないと思ったかもしれない。衣川に残された道は，梅川を啄木に奪われないようにするために，今こそ自分の思いを伝えて引き戻すこと以外にはなかったのではないだろうか。持って行った薔薇の花を歌に詠んでもらい，梅川の啄木への思いも頂点に達したところで，佐藤衣川の危機感も頂点に達しただろう。以上のように考えると，3月21日夜に衣川が共立笠井病院を訪ね，酒を飲んで梅川を外へ連れ出して口説いたという行動は，不思議なことではなく，恋する男として自然なふるまいだったと解釈できるのではないか。佐藤衣川のおかれた状況と心情を考えれば，梅川との間に21日深夜なんらかの出来事が起ったことは間違いないだろう。

8．梅川事件を立証する物的証拠

これまでに，梅川自身が否定していない啄木日記の内容をもとにして，啄木との関係，小奴とのつながり，また佐藤衣川の立場などから，21日夜に事件が起り得る可能性があったかどうかを検討してきた。その結果，梅川との関係で窮地に追い込まれた佐藤衣川が局面打解のために，少々不器用で乱暴なやり方だったかもしれないが，思い切った行動に出た，それが梅川事件だったと考えることができる。

ここでは，梅川事件を立証すると思われる物的証拠について考察したい。梅川事件は，二つの段階に分けられる。前半と後半である。前半は，梅川と衣川の間に起ったトラブルであり，後半はそのことを話すために啄木の部屋を訪ねた梅川と，その場に居合わせた小奴との対決である。当然のことながら前半がなければ後半は起り得なかった。

17日夜，衣川，日景の目の前で梅川が紅い造花の薔薇を啄木に贈ったことはすでに書いた通りである。この一輪の薔薇の行えを見ていこう。朝の4時まで意地の張り合いをした末，梅川が帰ったあと，女の戦いに勝ったと考えた小奴は戦利品として造花の一輪を持って行った。

「〝私が勝ったんだから，これを貰ってっても好いでせう〟と奴は云った。　梅川が拵えて来た一輪の紅の薔薇の花は，かくて奴の物となった。」（3月21日日記）

翌日昼近く，啄木は小奴の使いで目を醒ました。小奴は手紙にそえて一枚の写真を送ってよこした。

「小奴からの使で目をさました。十一時半，手紙に添へて，去年の夏捉ったといふ小蝶と二人の写真を贈って来た。」（3月22日日記）

小奴はなぜ急に写真を送ってよこしたのか。決して新しい写真ではない。半年も前に撮ってあったものだ。別にこの日でなくても良さそうに思われるのに，わざわざ使いまで差し向けて写真をよこしたのは，強引に持って帰った薔薇の造花のお返しの意味があったのだろうか。紅い造花の薔薇は，梅川の象徴である。小奴は前夜の女の闘いに勝った自分の象徴が，薔薇の替りに啄木の部屋に置かれるべきだと考えたのではあるまいか。

啄木の部屋から薔薇の造花がなくなった事実に，いち早く気づいたのは，当然のことながら，梅川本人であった。

「〝花は怎うなすって？〟とは此日此女が室に這入って来て初めて出した語である!!」（3月22日日記）

この造花が，小奴に持ち去られ彼女の部屋に飾られていたことは，後日判明する。梅川事件から約一週間後，釧路を去る決意をした啄木は，気持ちを伝えるために小奴へ手紙を送った。それを見た小奴が下宿を訪ねて来て，この時に翌日午後，啄木が彼女の家を訪問する約束をした。

「自分の下駄を穿いて出た横山の帰るを待っ

て，一時頃，約の如く奴を訪ねる。

六畳間，衣桁やら箪笥やら長火鉢やら，小ヂンマリとした一室に，小机には，何日ぞや持って来た梅川の薔薇の花が飾ってあった。」（3月29日日記）

梅川から啄木に送られた薔薇の造花と，小奴のもとにあった一枚の写真は，3月22日を境にして持主を替えた訳である。この事件で，梅川と小奴が啄木の部屋でハチ合わせするということがなければ，そのような交換は実現しなかったのではないだろうか。写真は啄木写真帖[8]に掲載されており，現在でもわれわれは確認することができる。造花の薔薇は今はないだろう。今はなき一輪の紅い薔薇ではあるが，この花の行えこそ，一時期激しく啄木に心を寄せた梅川の心情も，それを歌に詠みながらも目は小奴を向いていた啄木の状況をも如実に示しているように思われる。そしてさらに重要な点は，写真と造花の薔薇が，梅川事件の後半部を立証する物的証拠であることである。

10，梅川事件を立証する事がら

ここでは，梅川事件が実際に起ったことを示す事がらを二つ取りあげたい。

最初は鹿嶋屋の市子が遊びに来たことである。

市子は小奴より2歳下の鹿嶋屋の売れっ子芸者である。啄木は2月20日夜，市子と一夜を共にした。しかしながら，翌21日に初めて会った小奴の方に啄木の関心が移り，市子は面白くなかった。3月初めには，市子が借りるか，もらうかの約束をしていた尾崎紅葉の「金色夜叉」を啄木は小奴にやってしまい，市子は気を悪くした[5]。

「既にして市子が来たが常の如くでない。小奴に金色夜叉を置いて来た事を一晩怨まれた。」（3月5日日記）

これに対して啄木は，当時自分が書いていた釧路新聞「紅筆便り」の中で，

「近頃粋界に金色夜叉事件なる新事実ありとの事に候ふが何の事やら未だ判明いたさず候，かしこ」（3月14日記事）

と書いた。この記事はただ単に市子をからかっただけのものとしか受け取れない。市子はよけいに怒ったことだろう。

「市子はお座敷，一寸来て金色夜叉事件の嫌味を並べて行った。」（3月20日日記）

市子は，わざわざ自分のお座敷を抜け出して来て，不満をぶちまけて行ったのである。

3月5日と20日の二度にわたる執拗な市子の抗議が功を奏したのかもしれない。啄木は，3月21日昼に遊びに来た鹿嶋屋のてるちゃんに，市子へプレゼントする写真の額を持たせてやったのである。二月の白梅の花に続き写真の額を贈り物にもらい，市子は機嫌を直したのか，3月22日の昼すぎ啄木の下宿を訪ねた。日曜日なので啄木は居るだろうと見当つけてやってきたに違いない。しかしあてがはずれた。あいにく先客がいたのである。

「間もなく梅川がやって来た。怎やら浮かぬ顔をして，其癖，目が輝く。所へ鹿嶋屋の市子が遊びに来た。二十分許り居て帰る。玄関で，〝お楽しみ！〟などと狎戯けて出て行く。」（3月22日日記）

市子よりもはるかに歳上の女と啄木は，なにやらいわくありげに対座しており，市子を前にしてよけいに話しずらそうにしている様子が感じられただろう。意気揚々と出かけてきた市子の出ばなは，完全にくじかれたことになる。仕方なしに引きさがったのだろう。「お楽しみ！」というにくまれ口をたたく以外に，やり場のない気持ちを表現する方法がなかったのかもしれない。

以上のことから，この日の市子の行動は，突発的に起ったのではなく，二月初めから始まっている啄木とのかかわりの中から出て来ていることだと考えることができる。市子が来たのは本当であろう。実際に起ったことの中に，ありもしなかった梅川事件を想定し，その翌日梅川が訪問したことにして押入したとは考え難いので，両方共に実際にあったことだろうと解釈できる。

梅川事件が実際に起ったことを示す事がらの二つ目は，3月24日の啄木日記の中に存在する。

「夕刻上杉君が来て，衣川が梅川事件で日

景君に叱られた事，日景君が自分に対して不愉快で居る事など話す。九時頃帰って行った。」

釧路新聞社の同僚上杉小南が来て啄木に伝えたことの前半は，「衣川が梅川事件で日景君に叱られた事」である。これこそが，21日深夜，梅川と佐藤衣川の間になんらかのトラブルがあったことを示す決定的証拠である。

上杉が伝えたことの後半は，「日景君が自分に対して不愉快で居る事」であり，その原因の大部分は欠勤していることだろう。3月15日から24日までの10日間のうち，日曜日が2日，春季皇霊祭の祝日が1日あるので，出勤しなければならないのは7日間である。そのうち啄木が出社したのは，3月18日から20日までの3日間のみで，残りの4日間は欠勤であった。夜中に長時間浜辺を散歩したり，朝方まで起きていたり，他にハッキリした理由があった訳でもない。このような勤務状態ならば，日景主筆ならずとも不愉快になるだろう。日景が啄木を批判しているという上杉からの情報は，啄木にとって決して気持ちの良いものではない。そのようなことを，フィクションで日記に書く人間がいるとは考えられない。自分自身の，できれば耳にしたくない不愉快なニュースと並列に記されている，「衣川が梅川事件で日景君に叱られた事」は，実際に上杉小南の口から発せられたことに違いない。

11. 梅川操の真意

これまで，色々な角度から梅川事件が実際にあったのかどうかを検証してきた。その結果，梅川本人は否定しているにもかかわらず，梅川事件は存在したという結論に達した。それではなぜ，梅川は執拗に日記がウソでデタラメだと言い続けたのであろうか。

岩城之徳[9]は，「啄木を憎む女」の中で次のように書いている。

「〈前略〉結婚に破れ，長男を失ってからの彼女の淋しい心を慰めるものは，『私は啄木の恋人であった』という若き日の思い出である。それは客観的には悲しい誤解であったとしても，長い苦悩の生涯につちかわれた唯一の心の支えであり，そう信ずることによって彼女は苦難の日々に耐えたのである。しかし，戦後啄木の日記が公開された時，彼女の眼に写った日記は永い間の思い出を裏切るような啄木の文章で埋まっていた。梅川が『啄木はウソつきだ』と逢う人ごとに叫んだのも，啄木とのよき思い出を唯一の心の慰めとして生きてきた彼女としては無理からぬことであった。〈後略〉」

岩城は梅川操が「啄木はウソつきだ」と繰り返し言っているのはなぜかを，正面から受け止めようとしていたのだろうか。梅川が生涯をかけて繰り返し言い続けてきたことは，割合明瞭である。梅川証言を詳細に検討すれば，彼女が何を訴えようとしていたか簡単にわかったはずだ。岩城が梅川証言をじっくり考えようとしたようには見えない。

「啄木の日記が刊行された時，いかにもふしだらに書かれている私を，もう年ごろになっている子供たちになんと説明したらよかったか……否定すればウソだと思われ，放っておけばどんな悪口をあびせられるか判らない。」（昭和30年11月9日北海道新聞記事）

子どもに見せられないくらいにふしだらに書かれている，それが梅川には許すことができなかった訳である。

「啄木は日記にずい分ひどいことを書いている。それも私が当時釧路新聞社の佐藤衣川に暴行されたなどと……ひどい，あんまりひどい〈後略〉」（同上30年記事）

これは，啄木日記3月21日の梅川事件の前半を指していると考えられる。小奴と対決した後半部分を認めれば，その前段階の暴行事件を認めてしまうことになると考え，梅川は小奴と張り合ったことなんかないと言い続けたのであろう。梅川が晩年の生涯をかけて逢う人ごとに訴えたかったのは，「衣川による暴行事件ではなかった」その一点だったように思われてならない。

21日深夜，佐藤衣川に口説かれて，迫られたのは事実だろう。しかし，梅川は佐藤衣川の求愛を断り，啄木との愛にかけたのだろう。その

ことを啄木に伝えたい一心で下宿を訪問したに違いない。うら若き女性の心理として，もしこの時，暴行されていたら梅川は啄木の下宿を訪ねようと考えただろうか。もともと，梅川事件が発覚して大きくなったのは，梅川が啄木の下宿を訪ねたからだ。これがなかったら，21日夜11時頃，米町を酔って歩く梅川と衣川を，上杉小南が見かけたことだけで終っていた。梅川は，衣川を峻拒してきたことを報告したかった訳で，暴行事件はなかったから啄木の所へ寄ったのだ。しかし，そのことが逆に話を大きくし，佐藤衣川が上司の日景に注意される事態を招いた。梅川自身も釧路にいずらくなり，やがて上京する結果になった。

翌22日になってから，梅川自身が語った事件の転末は「昨夜衣川が病院に来て飲んで，十一時頃梅川をつれ出した。厳嶋神社へ行って口説いて，アハヤ暴行に及ばむとしたのを，峻拒して帰って来た」というものだった。それにもかかわらず，啄木日記の方には21日の段階でもうすでに，「強姦でもされたと云った様の顔色だ。」と書かれている。21日深夜に啄木の部屋に訪れた梅川の顔の表情だけから，本当に「強姦」などということを思い浮かべたのだろうか。21日の日記はいつ書いたのであろうか。朝4時に梅川が帰り，そのあと小奴が引きあげ，啄木は枕についたが眠られなかった。日付は22日朝である。この時日記を書いたとも考えにくい。22日は昼近くに小奴からの使で目をさました。やがて梅川から手紙が来て，2時から3時の間に本人がやって来る。梅川は暗くなるまで居た。夜7時からは，大風雪罹災者救助のための慈善演芸会が，宝来座で催され，鶴寅芸者の芝居を見に出かけた。したがって21日夜から22日夜まで日記を書く暇があったようには見えない。21日と22日の日記は，宝来座の慈善演芸会から戻ってから寝るまでの間か23日以降に書いたものと推定される。そうだとすれば，啄木は同僚の上杉の口から，「衣川が梅川を姦したに違いないと云ふ」ことを聞いたあとで，逆のぼって21日の日記を書いたことになる。

「所へ上杉君が来た。昨夜十一時頃，泥酔した衣川子と梅川が米町を歩いて居た事を聞く。上杉君は，屹度衣川が梅川を姦したに違いないと云ふ。昨夜の事を見合して見ると，成程と思はれる節の無いでもない。」（3月22日日記）

ここでは，上杉の話を聞いて前夜の事を成程と書いているが，逆にこれを聞いたために，前日の日記の記述が影響を受けた可能性は否定できないだろう。

さらに，存在しなかったと思われる暴行事件があたかも起ったかのような印象を与える日記になった背景には，啄木自身の事実認識の問題があるように思われる。

日記を見る限りでは，梅川は啄木を知るはるか以前から衣川と顔見知りであり，衣川が頻繁に彼女のもとに通いつめていたことに，啄木は気がついていない。上司の日景も同様で，3月17日の梅川が薔薇の造花を持って来た場面にそれが如実にあらわれている。

全く心が通わぬ男が，突然女に襲いかかったら暴行事件であろう。二人の間がらをのみ込めていない啄木にとってみれば，ある晩急に，酒に酔って梅川に迫った衣川は「愍むべき破綻の子」になってしまうだろう。梅川は衣川の心の内を知っており，21日の衣川の行動を求愛と受けとめ，暴行とは感じなかったであろう。

梅川操が釧路を離れたあと，釧路新聞を送り届けたり連絡を絶やさなかったのは，佐藤衣川である。梅川上京後，数カ月してから衣川も東京へ出，わずか半年余りだがいっしょに生活をした。暴行を受けた相手といっしょに暮すなどということは考えられないだろう。

啄木離釧後，彼のあとを受けて釧路新聞を書き続けたのが佐藤衣川だった。その記事の中には，衣川の名前こそ明らかにしていないが，鋭く啄木を攻撃するもの，啄木と親密な関係にあった小奴や市子を激しく非難する内容のものが認められる。梅川をめぐって衣川がどれほど啄木をにくんだかが想像できよう。

啄木がそうだったように，研究者の多くもまた，佐藤衣川の存在を軽く見すぎている。福地順一の「梅川ミサホと啄木」は，啄木，梅川の

関係を詳細にまとめた好論だが，その中においても佐藤衣川と梅川の二人については，「もやもやした関係にあった」という記述にとどまっている。

啄木は，自分の目から見た事実を日記に書いた。それは，梅川の目で見た事実とは違っていた。梅川と佐藤衣川の間に，男と女のトラブルがあったのは確かだろう。しかしそれは，暴行事件ではなかった。一日も早い，梅川操の名誉の回復を願うものである。

12. まとめ

梅川操証言と啄木日記を比較検討しながら，梅川事件が存在したのかどうかを検証した。啄木と梅川，啄木と小奴，梅川と佐藤衣川それぞれ同時進行形の人間模様の中で，この事件は実際に起ったものと考えられる。さらにこの事件を立証する事がら，物的証拠についても論証した。梅川事件は存在したが，佐藤衣川による梅川への暴行はなかったと考えられ，なぜそのような混乱が起ったかについて考察した。

文　献

1）昭和26年4月22日　東北海道新聞
2）昭和30年11月9日　北海道新聞
3）昭和34年1月8日　北海道新聞
4）小田切秀雄　1967　啄木全集第五巻解説　筑摩書房
5）小林芳弘　1985　啄木と釧路の芸奴たち　みやま書房
6）福地順一　1981　梅川ミサホと啄木　豊談11月号
7）小林芳弘　1996　啄木と小静　盛岡大学短期大学部紀要第19号
8）吉田弧羊　1936　啄木写真帖　改造社
9）岩城之徳　1963　啄木を憎む女　「国文学」　第八巻第三号